ナラティヴ・コンサルテーションとは

○ナラティヴ・アプローチの立場を前提に、＜問題の原因＞や＜事例の本質＞や＜クライエントの真意＞や＜正しい介入＞や＜あるべき支援者の姿＞を**探らずに**、コンサルティの実践とクライエントの利益に貢献しうるコンサルテーションの方法と実践を探求すること。

○事例や状況を一つの結論に導くことなく捉え、**拡がりのなかで多様なままに**保ち、そこからいかに**複数の語り方を生み出せるか**に専心すること。

○その中で支援者やチームの、もちろん同時にクライエントとその家族の、手にする**選択肢が拡がり増えること**。

今日の（わたしの）キーワード

ナラティヴの複数性

narrative multiplicity
by ペギー・ペン

散種

la dissemination
by ジャック・デリダ

そもそも、ナラティヴ・アプローチとは

○ナラティヴ・アプローチとは、人々がナラティヴ（物語story）という様式で生きていることに関心を寄せ、その視点から人々と世界を理解し、はたらきかけを試みようとする営為の総称として広く捉えることができる。

○この時最も重要になるのは、言語とは、それに先だって存在する事象や出来事、経験を写し取る手段やではないし、その写し取りの行為がナラティヴ（語り・語ることtelling）なのでもない　―という視点である。**ナラティヴとは**、事象や出来事、経験といった人々の生きる**世界を構成し**、**産み出す行為であり実践である**という、ポストモダニズムにおいて共有された言語論的転回（linguistic turn）が強く意識されている。

→社会構成主義

そもそも、コンサルテーションとは　1

○コンサルテーションという概念を明確にしたといわれる精神科医キャプラン（Caplan,G.）は、メンタルヘルスの領域においてコンサルテーションとは、二人の専門家（その一方をコンサルタントと呼び、他方をコンサルティと呼ぶ）の間の相互作用の一つの過程であるとし、コンサルティが、自分の抱えるクライエントに関連した特定の問題を仕事上より効果的に解決できるよう、コンサルタントに援助を求める関係を指すと述べている。

（Caplan,1970）

Caplan,G.(1970)The theory and practice of mental health consultation. Basic.Books.

そもそも、コンサルテーションとは　2

①コンサルタントはコンサルティと異なる専門性をもつ／ないしは所属する組織・機関の外部に属する専門家であること
②コンサルタントとコンサルティはそれぞれ専門家として対等な関係であり、コンサルティングはその両者の協働的プロセスであること
③コンサルタントは、コンサルティ自身がクライエントの問題解決に向けて責任を果たせるように間接的に援助する者であり、クライエントに対する直接的な責任は負わないこと
④コンサルテーションで扱われるのは、特定の問題、すなわち個別の事例やチーム・組織における限定的課題であること

ナラティヴ・コンサルテーション における専門性

〇ナラティヴな営みにおける、コンサルタントの専門性とは、他領域の専門性というよりも、ナラティヴ・パースペクティヴを維持しながら事例をひらくための文脈を作り、コンサルティやそこに参加する人々を

多声的（*multivoiced*）で

多層的（*multistoried*）なものに

向けて案内する姿勢やスタンスを指す

ナラティヴ・コンサルテーションの鍵

事例の表現/再提示＝representation

語る・書く・歌う・描く・踊る…

×

事例をひらく　unpack／cultivate

リフレクティング・プロセス

↓

「外的会話（outer talk）」＝話すことと「内的会話（inner talk）」

＝聞くことの往還にその特徴があるもの

なぜリフレクティングか？

〇変化が起こる理由をアンデルセンは、ベイトソンの「差異を生み出す差異」に導かれて理解しようとする。変化のためには、会話のなかに大きすぎず小さすぎもしない適度な差異が持ち込まれること、つまり「いつもと違っていても違いすぎない何かを提供すること」（1991=2001,P.34）が重要になる。

〇彼にとっては、会話と会話の行き交いに自然と訪れる**「間（pause）」**と、そこでなされた会話とその過程についての十分な**「再考（after thought）」**が適度な差異を導く源泉であり、リフレクティング・プロセスの焦点でもあった。(2007)

Andersen,T.(Ed.)(1991)The reflecting team: Dialogues and dialogues about the dialogue.Norton.鈴木浩二（監訳）(2001)リフレクティング・プロセス―会話における会話と会話．金剛出版

Andersen,T.(2007).Reflecting talks may have many versions: Here is mine. International Journal of Psychotherapy ,11(2).27-44.

浅草行き

その老人ホームでは、低い音がもれるテレビの前が彼の定位置だ。名前を呼んで挨拶しても、表情は変わらない。強引に視界に入り、いつもの話をする。

「寒くなりましたね。今年の葱はどんなかんじですか」

ようやくいぶかしげに、彼は顔をあげる。

この北関東の地で６０年もの年月、葱を作ってきた人だ。その広大な土地を継ぐ者はなく、それを淡々とそつなく処分して間もないところで、記憶の不調は唐突に誰の目にも明らかになったという。

突然思いついたように、

「畑、見るか？」

と私を誘い、立ち上がる。冬の陽が斜めに差し込む開かない窓に額を押し付けて、

「これ、全部、俺の畑」

と自慢げに言う。見えるのは、覇気のない花壇とミニカーのような職員たちの車が並ぶ駐車場。

「広いですね」

「広いよ。あの山から降りる冷えた風が、葱にはいいんだ」

遥か先には、隣県の山並みが確かに霞む。しばらく並んで眺めていると、揺れる葱坊主が見えるような気がしてくる。

「鳥鍋、行くか？」

私たちは、また移動したようだ。たぶん、ここは浅草だ。フロアをついて歩くと、クリスマス会の案内が貼られた掲示板の影に手招きする。布をたくしあげるように膝のあたりで手を動かす。スカートを引き上げるように、催促しているのだ。働き者だった彼の唯一の楽しみが、演芸場やストリップ小屋巡りのための浅草行きだったことは、以前長女から聞いていた。

「父がでかけると、母は一日不機嫌で。持ち帰るお土産を喜んでいいのか悪いのか、子どもながらに迷ったものでした」と。

止まらない仕草に負けて、

「だめよ。ここでは」

踊り子らしく聞こえるように、少し気取って蓮っ葉に言ってみる。すると彼は胸や尻のポケットのありそうな辺りを探りはじめる。チップを渡そうというのだ。

「そうじゃないの。もう、できないの。年だから」

ふと口をつく。彼の目が、問いかけるように光を増す。

「無理なのよ。もう、引退なの」

言いながら、喉がつまり、少し声が震えた。自分の声が自分に返る。引退。何から。

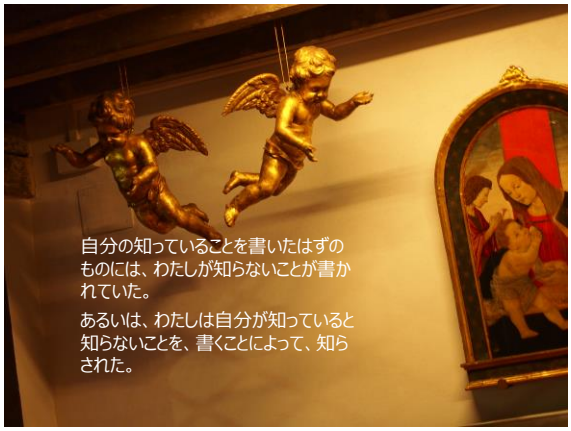
どこから。何が無理なのか。私は、どこにいるのか。どこにいくのか。涙ぐみそうになる。

「大丈夫だ。心配ない。大丈夫だ」

いつの間にかすっかり醒めきった眼差しで、ほとんど慈悲深い声で、彼は私を慰める。葱を育てた、節と皺だらけの手が二の腕にふれる。大丈夫だ、と私は思う。心配ない、少なくとも今は、と。

彼と私は、浅草を彷徨う。

私たちは、揺るぎなく、ここにいる。



なぜ「書くこと」か？

〇書くという行為には、形式があり構成が伴う。人称が選ばれ、時制は自由になり、比喩がイメージを増幅する。そして、ジャンルが生まれ、その文章に固有の声が響く。Sさんとの時間は過去のものである。だが、その過ぎた時間を再-提示しようとしたとき、物語る声は現在形を求めた。（Ricoeur.P.217-231）

〇書くことは、こうして無数のバージョン提示を可能にする。だが、繰り返すなら、それらはすべて**オリジナルをもたない改訂版**であり、そのバージョンごとに見える世界が変わることにこそ意味がある。人や出来事、ケースと呼ばれるその状況を、**重層性と開放性と非決定性のなかで受け取る**ために、物語的記述は要請される。

Ricoeur, P. (1985) Temps et Rècit ToèmⅢ Le temps racontè. Paris. Éditions du Seuil.（久米博訳 (1990) 時間と物語Ⅲ：物語られる時間. 新曜社）

「書くこと」－それはリフレクティング・プロセス

〇ペンが強調するのは、「書くことのために選んだ声は、決して以前には使われたことのないもの」（Penn,2009,p.19）であるということだ。「書くことは、私たちの認識の速度を緩め、それらを開き、そこに何かをつけ加える。それは、彼らが重ねてきた凝縮された複雑さにスペースをもたらす」（P.25）がゆえに、語るときとは異なる声が自ずと生まれる。

〇書かれたものには、複数の声が交錯することにもペンは注目する。経験し記憶する者の声、それを書くための声、少なくとも二重の声がそこでは使用される。さらに、バフチン（Бахтин,1975）に従うなら、ここにはそれを読む（はずの・かもしれない）者の声もまた必ず伴われている。

→内的会話・外的会話

Penn, P. (2009) Joined Imaginations, OH. A Taos Institute Publication.

「書くこと」×リフレクティングは最強!?

「書く」・「読む」・「読み上げる」・「聞く」・「応答する」

〇書くこと自体が含む声の複数性を自覚し、それをさらにリフレクティング・プロセスのなかに配置して拡がりを増していく実践

—としてのナラティヴ・コンサルテーション

〇書き読み上げるという過程には、自分のことばを選び、書きことばを口にし、それがまた聴き手の話しことばによって書き手に戻されるという、豊かな「間」と「再考」が備わる。書くことは、リフレクティング・プロセスに馴染むことはもとより、それ自体をさらに厚くする作業となる。

もっと遠くへ—「書くこと」×「書くこと」

「『作家』や『著者』という言葉に暗示されている個という概念を、一個の孤立した自己の投影と見るのではなく、テクストを操るわれわれの共通の通路とみなしてもよいではないか」

「女性・ネイティヴ・他者」トリン.T.ミンハ p.48

—あらゆるエクリチュールはつねに・すでに、コラボレイティヴ・ライティング

「それらが磨かれて生まれてくると、私も生まれ出る、それらのそばに、慎ましく」 Cixous,H.（上記より重引）p.54

ありがとうございました